

旧西国街道を歩こう

～古のロマンを訪ねてみませんか～

主催/大竹ライオンズクラブ
共催/大竹ロータリークラブ・大竹市青少年育成市民会議
(社)大竹青年会議所・国際ソロプチミスト大竹
大竹商工会議所青年部
後援/中国新聞社・大竹市教育委員会・和木町教育委員会
大竹商工会議所・和木町商工会・大竹市PTA連合会

- 1 木野川渡し場跡
- 2 三角和久・巻石(渡し口波止場)
- 3 善福寺
- 4 大元神社
- 5 太閤振舞井戸
- 6 膝池神社と汐涌石
- 7 長州の役、古戦場跡
- 8 通信省無線中継所
- 9 橋姫地蔵
- 10 楓園和田翁之碑
- 11 小方国民学校 門柱
- 12 雁木
- 13 鷲の碑
- 14 割り庄屋 和田家の門
- 15 浄土宗「智海山 西念寺」
- 16 亀居城址
- 17 一等水準点
- 18 薬師堂
- 19 大歳神社(玖波)
- 20 大歳神社 力石と神生石
- 21 称名寺の窟観音
- 22 玖波本陣跡(洪量館)
- 23 角屋の釣井・高札場跡
- 24 玖波の卯建の町並み
- 25 一等水準点
- 26 馬だめし
- 27 玖波の石畳

スタンプ押印欄

木野川渡し場跡

膝池神社

苦の坂峠

橋姫神社

西念寺

監修 畠中 鈞臈

①木野川渡し場跡

西国街道の要所で、安芸・周防の国境である。古代から大和の国と九州太宰府までを大路といわれ、中世から近世に入り、日本の往還道として重要な役割を果たした。

この木野川の渡し場は、交通も頻繁で、渡し守は木野・小瀬両村から2人づつ昼夜交代で出仕した。人は2文、牛馬は4文、そしてお役人は無料であった。今も昔日の姿をとどめている。



②三角和久・巻石(渡し口波止場)

福島堤防とも言われる。江戸時代初頭に中津原の村を、洪水から守るために大きな石を積み重ね三角にして水の流れを反らし、それに続き築かれた堤防を(巻石)と呼んでいる、強固で城郭の石垣のごとくである。



三角和久

巻石

一説によると、あまりにも川の中中央に向かって競出していることから、福島正則は毛利に気がつかない、"頭領は誰だ"と言われ、進み出た頭領に、この巻石の上で"切腹"を言い渡したという話もある。
周防吉川方も、水の流れを食い止めるために、現在、見られるように、向こう岸に石垣を築いた。



④大元神社

大正5年、この神社の氏子総大衆の集まりで、若者に何か元気をと考え、まとまったのが「神楽」の導入であった。
大栗林の松崎勘一先生により一週間の短い期間であったが、上木野にお泊まりいただき、指導に熱が入り、厳しさの中にも、温かみのある先生であったという。自ら衣装を縫うなど、教える側と教わる側が、一つとなり、先ずは、早瀬ヶ迫神社の秋祭りに初舞いを披露、大変喜ばれた。



⑤太閤振舞井戸

地区では、通称「つばかわの井戸」と呼ばれているが、言い伝えによると、太閤秀吉、文禄・慶長の役で、九州・名護屋城への道すがら、この湧き水で点てた村人のお茶の振る舞いに、たいそうご機嫌であった。また、家主の庭の柿を、"美味しいの"と食べたという。



⑥膝池神社と汐涌石

膝池神社は、厳島神社の祭神である市杵嶋姫命が安芸へ移るとき、苦の坂から膝(機織りの縦糸を巻く鉄の棒)を投げ捨てた池を埋めて、社殿を建てたことによるといわれます。
この社殿の石垣には、穴のあいた汐涌石があり、管弦祭(旧暦6月17日)の夜には、石の穴から海水が湧き出ると伝えられています。



えらや苦しや この苦の坂は 金のちきりも 要らぬもの

⑦長州の役 古戦場跡

慶応2年(1866)6月13日幕府高田軍(新潟県)1,000の兵が苦の坂頂上に集結、これに対し長州軍(山口県)250の兵が高田軍に向かって3方から、翌14日早朝攻撃を仕掛け、一気に撃破したといわれる古戦場。



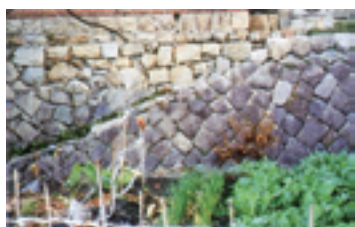
⑨橋姫地蔵

旧西国街道一つ坪馬ころ橋の下に鎮座する姫神様は、年代由緒など不詳であるが、昔から往來の安全や、喘息など喉の病にご利益があるといわれ広く信仰されている。



⑫小方の雁木(波止場跡)

「雁木」とは、雁が鉤型に飛ぶようすを語源とし、ぎざぎざしている意から棧橋の階段の呼称となりました。亀居城跡の石垣と共に市域でもっとも古く、原形を今に残した貴重な建造物です。
寛文2年(1662)に城回り新開が築かれた当時のものといわれ、すでに享和3年(1803)の絵図には波止場が描かれているなど、良港として漁業が盛んに行われ、また、海上交通でも大きな役割を果たしました。
この雁木は、嘉永5年(1852)、「新町新開」の完成と共に役割を終えました。



⑬鷲の碑

この碑は、天保14年(1843)松尾芭蕉の没後、150年忌を記念して建てられたものです。
鷲に つつみてぬくし 鴨の足
その後、元治年間(1864～1865)、当時の俳人市川蘭史・永田斗泉らが鷲社という俳句の会を組織しました。慶応から明治にかけて、この俳壇は隆盛を極め、後に清遊倶楽部と名を改めました。



⑭割り庄屋「和田家の門」

江戸時代初期より、代々庄屋・割り庄屋を勤め、世襲制を守り、明治に入り、廃藩置県による中央集権政治が始まり、それまでの制度が廃止されるまでつづいた。
長州の役では大竹・小方、そして玖波村がほとんど焼失され難渋するが、被災者の救済に乗り出し、広大な「烏帽子新聞」の築調に当たり村人を救った。翌年慶応3年(1867)に建てられた門構えが、140年の時を経てそのままの形で残されている、貴重な建物文化財である。



⑮浄土宗「智海山 西念寺」

創建は、江戸初期天和の頃(1681～1683)といわれている。
長州の役では、長州軍の前線基地として本陣が置かれ幕府の標的となり、海上から軍艦による艦砲射撃で砲弾が寺院正面の桁を支える柱の斗組に打ち込まれ、その跡を今に伝えている。



⑯亀居城址「亀居公園」

城は、関が原の合戦で東軍に味方し、勲功のあった福島正則が、慶長8年(1603)から5年の歳月をかけて築城したが、完成後3年にして慶長16年に破却された。
城郭は天守閣を除き11の郭からなり、海を取り入れた壕をめぐるせた、自然の要塞とした城であった。天守閣の石垣・刻印・郭・詩の坂道・そして小方領の島々を遠望(加邊島・阿多田島・支の子島・姫が小島・甲島)することが出来る。



⑰大歳神社(玖波)

鎮座地「大竹市玖波五丁目」主祭神「大歳神」副祭神「神大市姫・金山彦神・猿田彦神」御鎮座年は不詳。但し、境内の神生石を信仰の対象とした古代信仰から発祥したと推測できる。
「力石」は、江戸末期から明治時代にかけて、当地の若者たちが神社などで力だめしに使ったという楕円形の自然石で、表に重さや人の名前などが刻まれています。大歳神社境内に奉納されている力石には、角ヶ崎直松という地方の相撲取りが、明治23年24歳の時、78貫目(292.5kg)のこの石を抱え上げたときと刻まれています。
また、この神社の裏山には「神生石」があります。古代から、神が宿った存在として、石などの自然物を崇める信仰がありますが、この神生石も眷として崇拝され、後にこの横にご神殿を建てたといわれています。



⑳称名寺の窟観音

称名寺の創立は、天文7年(1538)で「僧円達開基、境内に岩窟あり、石仏を置く」との記録があります。
その後には岩穴が崩れたため、江戸末期から明治初め頃に、その石仏三十三観音を現在地へ移しました。



㉓角屋の釣井・高札場跡

高札場跡の後側に、石畳に囲まれた立派な井戸があります。切石の粋をもつ大きな井戸で、江戸時代から使われていました。
海に近いところですが、真水が豊かで、民家や宿場の共同井戸・防火用水など、いろいろなことに利用されていました。
また、この井戸は、行者山へ登る信者の水ごりの場にも使われていました。



㉔玖波の卯建の町並み

「卯建」は独立家屋の区切りとも考えられますが、防火用の袖壁ともいわれ、白壁は構造的な美しさをあわせもっています。
玖波の町並みの大半は長州の役の際に焼失したため、明治以降に再建されましたが、この卯建が多くみられます。



㉔玖波の石畳

玖波の石畳は、西国街道(旧山陽道)の鉢の峠を大野側に下る坂道にあり、長さは約22m続いています。急な坂道の土流れを防ぐために造られたもので、当時の街道を管理した藩や村人たちの苦心がしのべれます。
また、この峠には、広島元安橋から7里にあたる1里塚が設けられ、往還松も植えられていたといわれています。

